

1. 変更内容、理由及び断層連続性評価への影響

- ・走向・傾斜をNS64Wに変更 (No.7)

【理由】BHTV画像で確認した結果、NS64Wが正しい情報であった

- ・条線方向を61Rに変更 (No.8)

【理由】走向・傾斜 (No.7) の変更により、基準方位が変わることに伴う変更

【断層連続性評価への影響】なし

2. 変更箇所

- a 走向・傾斜を「NS64W」に変更 (No.7)
- b 条線方向を「61R」に変更 (No.8)
- c 見直し後の走向・傾斜、条線方向に基づく図に変更 (No.7、8)

H24-H-6-1 深度9.58~14.36m 走向・傾斜 (No.7) を変更、それに伴い条線方向 (No.8) を変更

従前

見直し後

第833回審査会
机上配布資料1
敦賀発電所2号炉 敷地の地形、地質・地質構造について
参考資料1 薄片観察結果
参考1-56頁

第833回審査会 机上配布資料Iに追記(青太枠)

No.7 No.8
(走向・傾斜 : N33°W38°W、
レイク角 : 90°
に基づく条線観察結果)

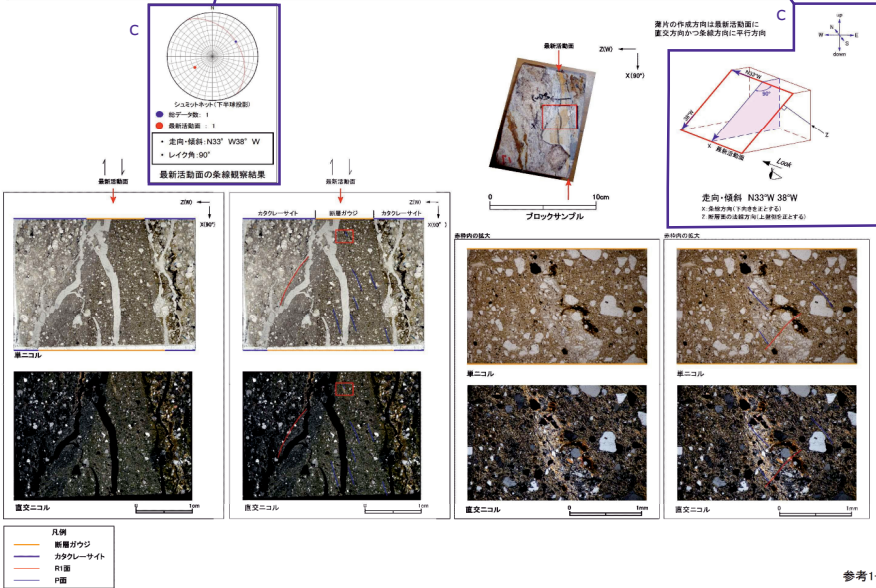
No.7 No.8
(走向・傾斜 : N33°W38°W、
レイク角 : 90°
に基づく模式図)

No.7 No.8
(走向・傾斜 : NS64°W、
レイク角 : 61°南傾斜
に基づく条線観察結果)

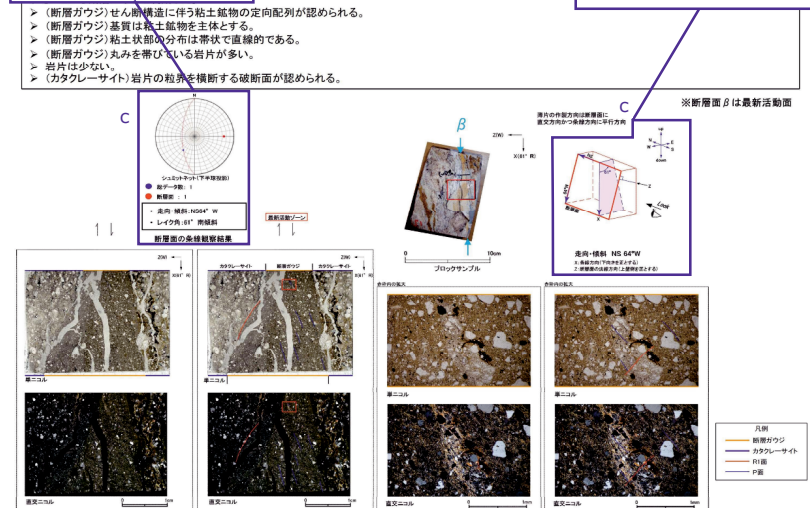
No.7 No.8
(走向・傾斜 : NS64°W、
レイク角 : 61°南傾斜
に基づく模式図)

H24-H-6-1カタクレーサイト(深度9.58m)から採取した薄片試料の観察結果によれば最新活動面の変位センスは、逆断層成分が卓越する。

試料の観察結果によれば最新活動ゾーンの変位センスは、逆断層成分の特徴が認められるが、カタクレーサイトの特徴は、カタクレーサ



参考1-56



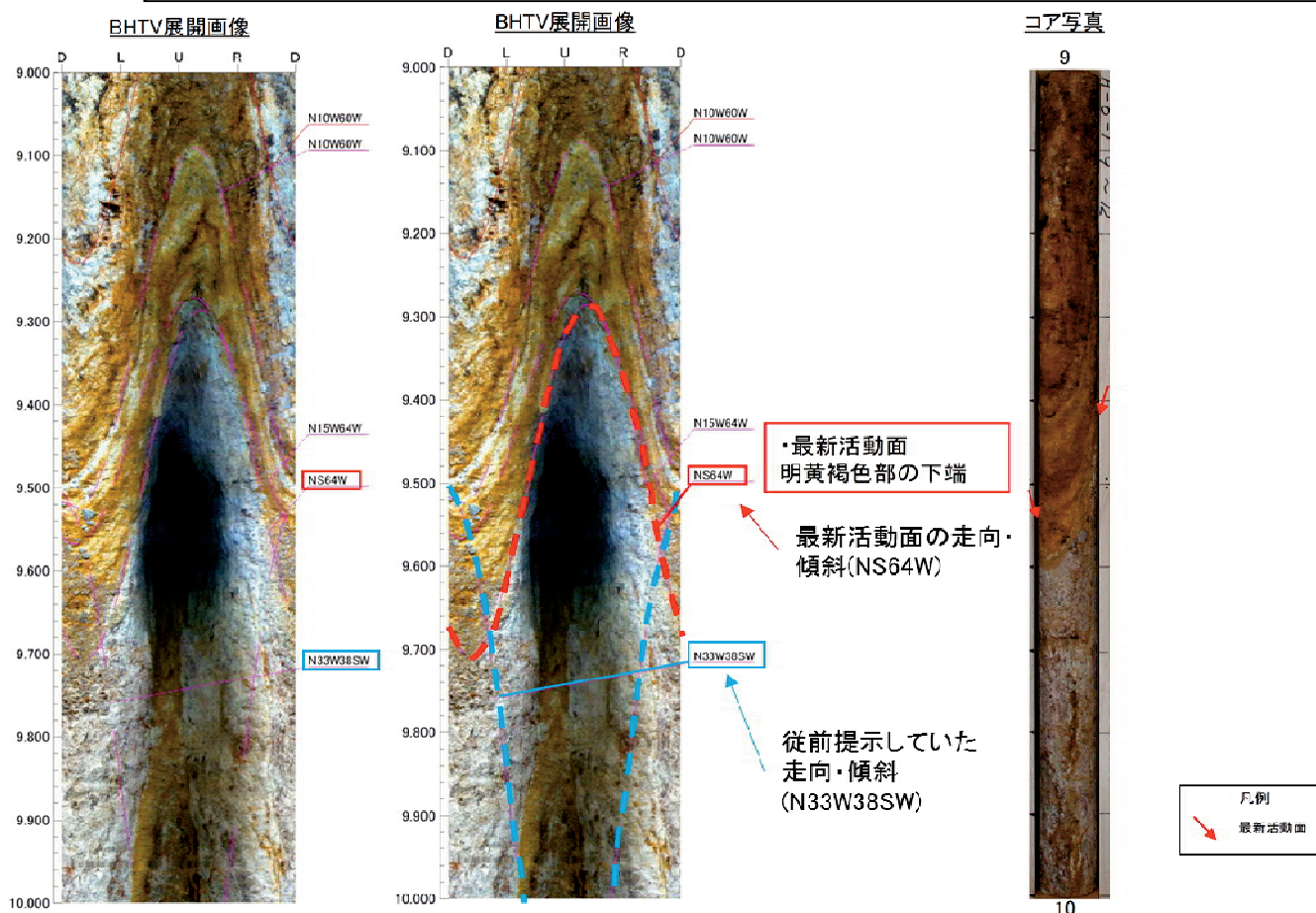
※断層面βは最新活動面

H24-H-6-1 深度9.58~14.36m 走向・傾斜 (No.7) を変更

- 従前提示していたデータでは、性状一覧表にN33W38SWと記載していたが、BHTV展開画像からの走向・傾斜を読み誤っていたことから以下のとおり走向・傾斜をN33W38SWからNS64Wに変更した。

ボアホールカメラ展開画像との対比結果 (H24-H-6-1 深度9.58~14.36m)

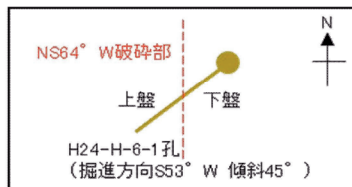
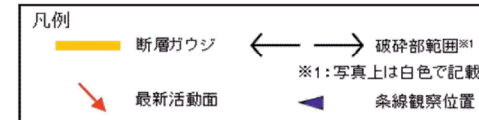
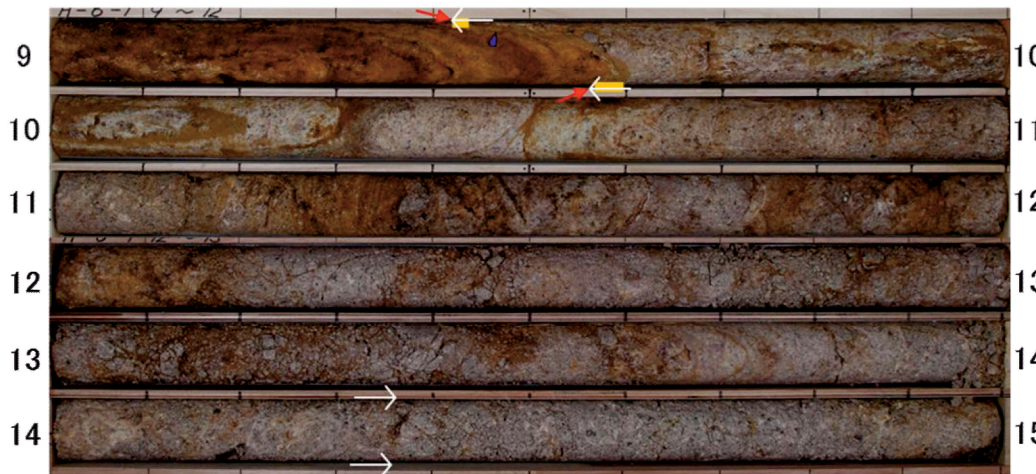
- H24-H-6-1 深度9.58~14.36mの破碎部の最新活動面の走向・傾斜はNS64° Wである。



H24-H-6-1 深度9.58~14.36m 走向・傾斜 (No.7) の変更に伴い、条線方向 (No.8) を変更

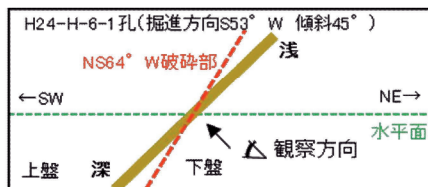
- H24-H-6-1孔 深度9.58mのK断層の断層面の走向・傾斜はNS64°Wであり、条線観察は下盤側から実施している。

コア写真



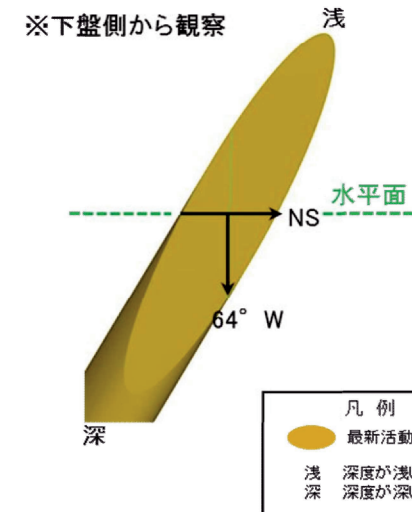
- ボーリングは掘進方向S53° W, 傾斜45° で掘削している。
- 破砕部の走向・傾斜はNS64° Wであり、ボーリングと破砕部の平面的な位置関係は左図のようになる。
- 破砕部は西傾斜であることから、西側が上盤、東側が下盤となる。

図1 H24-H-6-1孔位置平面図(模式図)



- ボーリング(掘進方向S53° W, 傾斜45°)と破砕部(走向・傾斜NS64° W)をボーリング孔沿いの断面図で示すと左図のようになる。
- ボーリング孔の浅い側が下盤、深い側が上盤となる。

図2 H24-H-6-1孔を通る断面図(模式図)

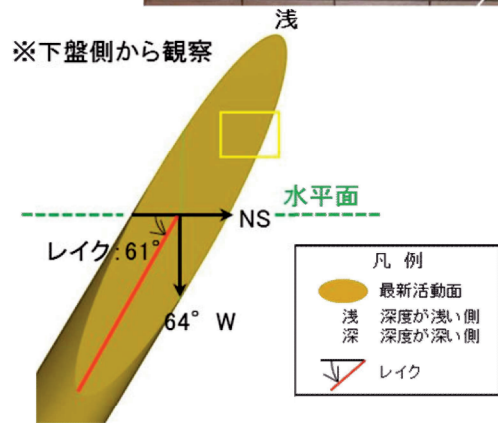


- ※図2で示した観察方向から、最新活動面に正対して描いた3次元的な図

図3 最新活動面と走向・傾斜の関係図

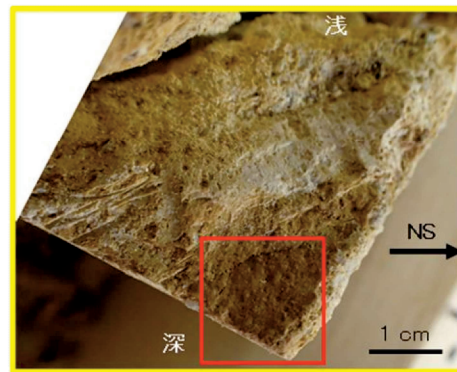
H24-H-6-1 深度9.58~14.36m 走向・傾斜 (No.7) の変更に伴い、条線方向 (No.8) を変更

• H24-H-6-1孔 深度9.58mのK断層の断層面の走向・傾斜はNS64°Wであり、条線観察は下盤側から実施している。

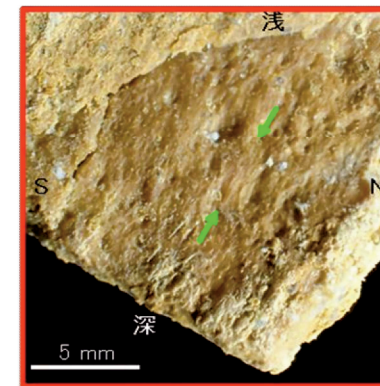


深
 ・前頁の図3fに、計測した条線値を走向・傾斜等を用いて補正したレイクを赤線で表示している。
 ・下盤側から最新活動面を見た模式図のため、レイクがL方向に描かれているが、数値は上盤側から見た61Rとなる。

図4 最新活動面と走向・傾斜、条線の関係図



条線観察位置拡大



赤枠内拡大

